

藤木九三・三田幸夫監修 『ケルンに生きる』

登山が一般化して登山者人口が急増し、特に中高年登山や、ツアー登山などによる遭難事故が増加して以来、遭難防止対策ハウツー本の類が沢山出版されている。これはこれで誠に結構なことであり、遭難予防の登山テキストとしては簡便で即効性はあるが、著者がそれらの遭難事故の直接の関係者ではなく資料などからの記述であうから、事故の実情や現場のリアリティーには欠けるというきらいもある。

おそまつな遭難事故は別として、山岳遭難事故が起こった背景には種々の要因の連鎖があろうし、また、その捜索活動には余人には測り知れない苦労があったことであろう。

山岳遭難事故を真に防止するためには、個々の遭難事故を詳しく分析し、その経緯、原因、捜索状況などを理解した上で、これらの事故を他山の石として今後の遭難防止に生かしていかなければならないが、このためには個々の遭難事故報告書などを繙く必要があり、一般的にはそのような資料を入手することは困難である。

本書は、一般の遭難読み物と異なり、遭難事故の直接の当事者（生還した遭難者本人、捜索・救助関係者など）が遭難時点での生々しい実情を綴ったものであり、そのために、遭難というアクシデントやその防止について多くの示唆を得ることができると共に、遭難者への友情や思いなども生々しく書かれていて深い感動を覚える。

本書で取り上げられている遭難事故は、大正12年1月に槇有恒、三田幸夫、板倉勝宣のパーティーが厳冬の立山・松尾峠で猛吹雪のため遭難、板倉が凍死した事故をはじめ、昭和2年12月の早稲田大学山岳部の針の木岳・赤石沢での雪崩遭難、昭和5年1月の東大スキー山岳部0B4名と芦嶺の入夫2名の計6名が就寝中の劔沢小屋が雪崩に襲われて全員が死亡した雪崩遭難事故、昭和16年2月明峯山岳会の谷川岳マチガ沢での雪洞崩壊による就寝中の7名全員死亡事故、昭和7年3月の常念岳二重遭難事故（疲労凍死した2名の1次遭難者とそれの捜索に向かった救助隊3名の雪崩遭難死）などの遭難事故が記載されている。刊行時期の関係で昭和34年（1959年）以降の事故は掲載されていないのが残念ではあるが・・・。

二玄社 1959 年刊（全 5 巻）

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

